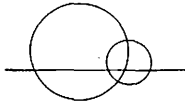


〔論文〕



# 書院生によるフルンボイルに関する調査報告書について

愛知大学東亜同文書院大学記念センター  
オープン・リサーチ・センター  
リサーチ・アシスタント

暁 敏

## I. はじめに

筆者は『オープン・リサーチ・センター年報』第2号にて、「書院生のフルンボイルにおける調査旅行」<sup>1</sup>という題で、フルンボイルにおける書院生の調査旅行についてまとめた。

文中において、『東亜同文書院大旅行誌』（オンデマンド版）<sup>2</sup>の関係各巻を基本資料として使用し、数回にわたる書院生による調査旅行について、書院生はフルンボイルにどんなルートで入り、どんな調査ルートでどんな地域を訪れ、そして何を記録したのかについて検討した。最後に、書院生によるフルンボイルの調査のいくつかの特徴を提示した。

本稿では、書院生が調査旅行を実施した後に作成した報告書を取り上げ、書院生の調査旅行の特徴などについて検討する。

## II. 書院生によるフルンボイルにおける調査旅行の概要

現段階において確認できる資料から見ると、書院生が初めてフルンボイルに入って調査旅行を行ったのは、1925年、第22期生の「北満及び国境調査班」によるものである。次に、1931年に第28期生の「露支国境遊歴班」と「黒龍江省遊歴班」の2班がフルンボイルを訪れている。1932年になると、第29期生の「第2班」と「第6班」、1933年には、第30期生の「海拉爾調査班」がそ

れぞれフルンボイルで調査旅行を実施している。さらに、1934年に第31期生の「札蘭屯・免渡河・満州里調査班」がフルンボイルを訪れている。それから、1935年には第32期生の「龍江省景星縣・泰康縣調査班」がフルンボイルを訪れたが、具体的な調査を実施しなかった。

これらの中で、満州国が建国された後に初めてフルンボイルにおいて調査を実施したのは第30期生の「海拉爾調査班」である。さらに、この「海拉爾調査班」は書院生の中で初めてフルンボイルの北部に位置し、当時のフルンボイルにおいて唯一の農耕地帯で、白系ロシア人が多く住む三河地方に足を踏み入れた。また、同調査班は書院生で最も長く（滞在期間一ヶ月以上）現地に滞在し、ハイラルを拠点にしてフルンボイルの南北を踏破しており、その調査範囲が書院生のフルンボイル調査の中でも一番広い範囲に及んだ。

その調査の成果としては『第27回支那調査報告書』第25巻「三河地方及北部国境地方調査班」の報告書としてまとめられた。同報告書において、三河地方及び北部国境地方、南部フルンボイル、満洲里の事情およびフルンボイルの畜産について記述している。同時に、この報告書は書院生による本格的な「フルンボイル調査報告書」としての価値が極めて高いと言える<sup>3</sup>。

### Ⅲ. 「海拉爾調査班」による調査報告書について

上記から見ると、フルンボイルにおける書院生による調査の中で、滞在期間と調査範囲から見て、「海拉爾調査班」による調査が一番全面的であるため、ここでその報告書<sup>4</sup>を取り上げて具体的にその内容等について検討してみる。

同報告書の構成は、「第1編 三河地方及北部国境地方」<sup>5</sup>、「第2編 南部呼倫貝爾の概説」<sup>6</sup>、「第3編 呼倫貝爾に於ける畜産調査」<sup>7</sup>、「第4編 満州里概説」<sup>8</sup>、「第5編 海拉爾に於けるトルコタタルに就いて」<sup>9</sup>という5部分からなる。

報告書の内容構成から見ると、興味深いのは、全体で手書き原稿170枚であるが、第1編の「三河地方及北部国境地方」の部分が約全体の半分以上を占めている。その章立ては、「第1章 興安省北分省（旧呼倫貝爾）三河地方」、「第2章 興安省北分省（旧呼倫貝爾）北部国境地方」の2つの章によって構成されている。

第1章の「興安省北分省（旧呼倫貝爾）三河地方」は、それぞれ「第1節 地勢」、「第2節 人口」、「第3節 交通」、「第4節 産業」、「第5節 商業及び金融」、「第6節 風俗及び民度」、「第7節 文化施設」、「第8節 三河地方の警備状態」、「第9節 三河地方の将来」という9つの節によって構成されている。なお、第2章の「興安省北分省（旧呼倫貝爾）北部国境地方」の節の構成は第1章と同様である。

ここで、第1章の内容を具体的に取り上げていくつか興味深い点について確認してみよう。まず、調査を実施する「人員構成」のことである。今回のフルンボイル調査の人員構成については、

「視察調査参加分署員名

高波騎兵第老旅団長閣下

星騎兵連隊長閣下及小川副官殿

○<sup>10</sup>衛兵、下士官以下十名

海拉爾特務機関ヨリ一名、同協和会ヨリ一

名、通訳一名

同憲兵分隊ヨリ二名、同文書院海拉爾班四名、他<sup>11</sup>

乗用自動車二輛及トラック二輛」

との記録がある。すなわち、書院生は日本の軍、警察、諜報機関である特務機関、さらに協和会などと一緒に調査を実施したことが確認できる。

次に第4節の「産業」について確認してみると、中には「農業」、「牧畜業」、「林業」、「工業」、「鉱産業」などの項目が含まれており、とりわけ「牧畜業」について相当詳細な「部落別の牛・馬・羊の頭数表」の記録がある。さらにその信憑性を高めるために、第1資料としては「ダラガツェンカ<sup>11</sup>警察署調査資料」、第2資料としては書院生の海拉爾班員の調査資料、第3資料としては部落付近の住民の所有概数として推算したものという3つの資料を利用し、三河地方の正確な牛・馬・羊の頭数を示そうとした。そこで、一つ注意しなければならないのは、書院生はダラガツェンカ警察署が調査した資料を自由に使えたという点である。

さらに最後の第9節においては、三河地方の将来について「アドバイス」なり「提言」なりの記述が見られる。その一部の内容は次のようなものである。

「日滿両国○○<sup>12</sup>此地○○満州国の王道主義  
○○烏刺爾<sup>13</sup>方面へと延長○○基礎○○  
作○○である」。

すなわち、書院生はフルンボイルでの現地調査を踏まえ、最終的に国境地帯である三河地方の重要性を強調している。

これらのような報告書に含まれる具体的な内容を確認すると、書院生によるフルンボイルに関する調査報告書は、完成度の高い報告書であったと認めざるを得ない。一方、これを可能にしたのは、書院生がフルンボイルに到着した後に現地の日本の諸機関（軍、警察および特務機関など）から情報を収集できたことあるいはそれらの資料を自由

に利用できたことが、精度の高い報告書の作成につながったのではないかと考えられる。

#### IV. いくつかの疑問—むすびにかえて

以上、書院生の「海拉爾調査班」によるフルンボイルでの調査旅行と彼らによって作成された報告書について具体的に確認してきた。したがって、書院生の調査旅行の「性格」、あるいはその「特殊性」の一端を提示することができた。

しかし、「海拉爾調査班」によるフルンボイルの調査に対していくつかの素朴な疑問が残っている。以下、そのいくつかの疑問についてまとめておきたい。

第一に、なぜ日本の軍、警察、諜報機関などと一緒に調査を実施した点。言い換えれば、単なる「調査旅行」なのにどうしてこれらの機関が同行しなければならなかったのかということである。

第二に、資料および情報収集の問題。

第三に、調査の時期と意義に関する疑問。

第一の「なぜ日本の軍、警察、諜報機関などと一緒に調査を実施した点」については、残念ながら現段階においてその経緯などについて説明できない。

第二の「資料および情報収集の問題」については、書院生は軍、警察関係・特務機関などからの情報収集を行なったと考えられる。たとえば、前述したように三河地方の牧畜業の家畜頭数表を作成にあたり、書院生は「ダラガツェンカ警察署調査資料」を活用していた。このことが当時書院の「存在の特殊性」の一側面を見ることができる。というのは、筆者はこれまで当時のフルンボイル

に関する日本語による報告書などを丹念に収集してきた。この時期の報告書や出版物とさえいえば、だいたいマル秘あるいは極秘になっており、「普通の学生」ではなかなか見られないものが多い。このことから、書院生だから日本の軍、諜報機関から情報を収集できたことを物語っている。

そして、第三の「調査の時期と意義に関する疑問」ではあるが、三河地方の特殊性は、まず国境地帯で、同時に白系ロシア人の居住地でもあり、そしてフルンボイルの唯一の農耕地帯でもある。すなわち、当時、三河地方は農耕地帯であるため、その後の満蒙開拓団の入植予備地の性格をもつ。

実際には、この三河地方に本格的に満蒙開拓団が入植し始めたのは、1936年からのことである<sup>14</sup>。このことと関連付けて言えば、この1933年の時点で行なった書院生による調査は、ある種の「予備調査」だったかもしれない。管見の限り、書院生による三河地方での調査は、比較的早い段階の調査であり、その参考価値はかなり高かったと言える。要するに、早い段階で実施した書院生による調査およびその後作成した調査報告書あるいはいわゆる「調査の成果」が、どういうふうにか他の機関などに利用されたのかについては不明だが、少なくとも他機関の調査に参考となる部分が多かったのではないかと考えられる。

これらを総合してみると、書院生がフルンボイル地域あるいは三河地方で実施した調査については、いくつかの疑問が残されたが、返ってこれらの疑問はある意味で書院生の「調査旅行」の「性格」あるいはその「特殊性」の一端を説明しているのではなかろうか。



- 1 眺敏「書院生のフルンボイルにおける調査旅行」（愛知大学東亜同文書院大学記念センター『オープン・リサーチ・センター年報』2号、2007年）pp. 279 - 284。
- 2 東亜同文書院編『東亜同文書院大旅行誌』（愛知大学オンデマンド版）雄松堂書店、2006年。
- 3 前掲「書院生のフルンボイルにおける調査旅行」280～282頁。
- 4 全体の分量としては手書き原稿170枚。
- 5 手書き原稿100枚。
- 6 手書き原稿26枚。
- 7 手書き原稿30枚。
- 8 手書き原稿10枚。
- 9 手書き原稿5枚。
- 10 「○」の部分が判読不能である。
- 11 ダラガツェンカは三河地方の中心地である。
- 12 「○○」は判読不能な部分。
- 13 ウラルのこと。
- 14 森久男「満州国興安北省三河地方の満蒙開拓団」（日本現代中国学会『現代中国』第71号）140～141頁。